

日本産業衛生学会九州地方会ニュース

産衛九州

発行所 日本産業衛生学会九州地方会
〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
産業医科大学産業生態科学研究所
労働衛生工学研究室
TEL (093) 691-7459
FAX (093) 602-1782
発行責任者：地方会長 田中 勇武

(題字 倉恒匡徳筆)

快適な職場環境をめざして

学会理事 友国勝麿

(佐賀大学医学部 社会医学講座)



昭和47年に制定された労働安全衛生法・第一条の「……総合的計画的な対策を推進することにより職場における労働者の安全と健康を確保するとともに、快適な職場環境の形成を促進することを目的とする」と言う条文に見られるように、安全と健康の確保から一歩進んで、如何にして働き易い、快適な職場環

境を作り上げていくかが問われています。この快適な職場環境は、従来から言われてきた物理・化学的環境のみならず、精神・心理的環境も含めた幅広い捕らえ方が現在の産業保健活動には必要です。

昭和30年代より始まったわが国の高度経済成長期には物理的・化学的環境因子に関連する劣悪な作業環境を伴った多くの有害業務（騒音、有機溶剤、鉛、粉じんなど）が誕生しましたが、これらはその後の企業努力と相まって様々な環境改善対策が施され、少なくとも大手企業の事業場においては快適な職場環境にかなり近づいた感があります。しかし、今なお多くの中小零細企業においては、快適な職場環境には程遠い作業現場が多く存在していると思われます。この様な事業場に対して如何に指導・助言していくかが今後の労働衛生行政に課せられた課題と思われます。一般に、常時50人以上の労働者を抱える事業場における作業環境改善施策は、産業医や専門家の指導・助言を得ながら衛生管理者や現場責任者などが中心となってその企画・立案を行っているところが多いと聞いていますが、それには自ずと限界があると思われます。筆者は20年来、某製鉄所関連企業の数社において労働安全衛生管理業務に従事しているスタッフや嘱託産業医の方達と面識があり、彼らの好意により年に数回、作業現場を視察させて頂く機会があります。この様な機会を無理して持つのは、現場の実態を知らない大学人に産業保健の教育・研究は出来ないと言う筆者の信念からであります。更に私事で恐縮ですが、昭和47年に鉛の健康リスク評価に有用な尿中デルタアミノレブリン酸 (AL

A) の簡易測定法を確立し、30年近くに渡り広く利用頂いたのも、岡山県内の某自動車製作所における大掛かりなハンダ付け作業現場の視察がその研究の発端となっています。

最近、上述した労働者300人規模の比較的作業環境の悪い事業場の衛生管理者から聞いた話ですが、「何年たっても作業環境の改善が遅々として進まなかったのに、ある時期に工場長（トップ）が交代となり、その工場長が積極的に職場巡視を行い、次々と環境改善に向けた提案を行い、しかも予算化が速やかになされたことで作業環境が見違えるほど良くなった」という言葉を耳にしました。つまり、企業現場の実態把握と職場環境の改善に向けた経営者（トップ）の意識改革が如何に重要であるかを物語っているものと思われます。快適な職場環境の形成に向けた企業経営者（トップ）の意識改革を誰が、何時、どの様なかたちで促すかを考える必要があります。

さて最近の企業では製造業・非製造業を問わず、IT関連業務の増加や雇用・就労形態の多様化に伴い、産業保健上の新たな課題が生じています。低経済成長下で多くの企業がリストラを断行した結果、労働者1人当りの仕事量が急激に増え、このことがサービス残業や過重労働を強いられる要因の一つになっています。更に、時代の流れとは言え、IT関連業種の増加と共に裁量労働制を採用する企業が増え、その結果、通常の労働時間管理が行われ難いため、ともすればサービス残業や過重労働に移行し易く、健康上の諸問題（過労死、過労自殺など）が発生しています。一方で、現代社会の複雑な人間関係は企業内でも同様で、パソコン作業中心によるコミュニケーション不足と相まって心のケアが必要な職場環境で働かざるを得ない労働者が確実に増加しています。将来を託す若者の就労意欲が高まるような、快適で且つ働き甲斐のある職場環境の形成が21世紀には必要であり、そのためには単に物理的・化学的環境問題に留まらず、人間関係を含めた精神的にも良好な職場環境の構築が必要であります。若者にとって快適な職場環境は中高年労働者にとっても働き易い職場環境である筈です。この様な職場環境の構築には企業トップ（経営者）の意識改革が最重要と思われます。

地方会長のことば

九州地方会の現状

九州地方会会長 田中勇武

(産業医科大学 産業生態科学研究所 労働衛生工学)

ここ10年地方会の主要事業計画の項目を眺めていると、総会および理事会、地方会学会の開催、地方会ニュースの発行、研究会等開催と10年1日のごとく同じ事業が続いている。各事業内容は、少しずつ創意工夫がなされ、改良改善されてきており、その状況は、さながら Sustainable Development であり喜ばしいことと思う。反面、1つぐらい新しい事業が企画されてもいいのではとも思う。その企画を阻むのが予算である。

地方会の予算は、総会理事会10万、地方会学会20万、地方会ニュース27万、研究会等35万、事務その他12万と、ほぼ決まっている。

収入源は、本部からの地方会補助としての105万であり、健全な収支が続いている。持続可能な発展といえばそれまでだが、新しい方向は見えていない。

予算の中には、2年毎行われる役員選挙、地方会長、理事、代議員の選挙費用は含まれていない。選挙にかかる経費については、2年毎の支出として、過去の例から20万程度かかっている。今までは、地方会の繰越金で、これを取り崩しながらやりくりしてきた。繰越金で、やっと会計がバランスしている状況にある。しかし、長年の地方会からの声本部に届き、昨年12月の本部理事会で、地方の役員選挙にも助成する方針が出され、200万円が一括計上された。もちろん、5月に開催される本部総会において、予算案が承認されることが前提になる。このうち、いくら九州地方会に案分されるか決められてはいないが、取らぬ狸の皮算用ではないが、1割程度が期待できる。そうすると、役員選挙費として繰越金を保管しておく意味も薄れてくる。この繰越金の有効活用について、頭を絞る課題が生まれてくる。

昨年6月に地方会学会を戸畑で開催した。180名の参加を得た。地方会学会の開催について、寄附金に頼らずに、地方会からの助成金と学会参加費だけで賄うという方針を立てて実行可能か試行してみた。演題募集を地方会ニュース発行の郵送に組み込んだり、予講集については、冊子作成を止めて、講演に用いるパワーポイントをA4紙1枚に印刷して、講演時に配布することで済ませた。ご批判があれば、甘んじて受けるが、経費節減には多大な貢献となった。人手については、すべてボランティアでお願いした結果、収支は、産業医科大学学会からの学会運営費援助5万を入れて、ほぼトントンであった。地方会学会開催は、3年毎のサイクルで、そのうち2回は福岡で、1回は福岡以外ということで開催の協力をお願いしている。今回収支はトントンとなったが、収支に関係ないところで、随分と頭脳と労力を出さないとやれないと感じたし、やってみて、引き受けたら大変だと実感できた。このような負担を開催地にかけていいのかというのが偽らざる気持ちである。地方会学会を無理なく引き受けていただくためには、最低限、収支の心配をかけない財政支援が不可欠であろうと考える。そのための方策について、昨年6月の代議員懇談会においても少し議論いただいたが、引き続き議論を続けて行きたい。

そのほかにも地方会と三部会（産業医部会、産業看護部会、産業衛生技術部会）の実りある連携についてや役員選挙の簡素化について、さらに東アジアを視野に入れた産業衛生についても気を配りながら、取り組む必要があると考えている。

今後ますますの会員の支援とご協力をお願いする次第である。

ひとこと

雅楽の調べと天皇のお言葉

高田和美

(産業医科大学客員教授)

昨年10月初め、厚生労働省の封筒の中に、10月27日の赤坂御苑での園遊会に天皇陛下がご招待くださるという内容の宮内庁長官からの書状が入っていました。

緊張して拝読した内容は、当日午後1時に東宮御所西門から夫妻で参入のこと、服装は男子はモーニングコート、紋付羽織袴、制服または背広、女子はデイドレス、白襟紋付または訪問着等というのでした。

10月26日、福岡空港から上京、帝国ホテルに一泊しましたが、当日は朝から雨で度々空を見上げておりました。ところが正午には雨が止み、午後1時には殆ど快晴の御苑に参入することができました。

服装は私は紺の背広、妻はデイドレスでしたが、入門の際、皇室護衛官から受け取った名札は「日本予防医学協会会長 高田和美」「高田和美令夫人」でした。

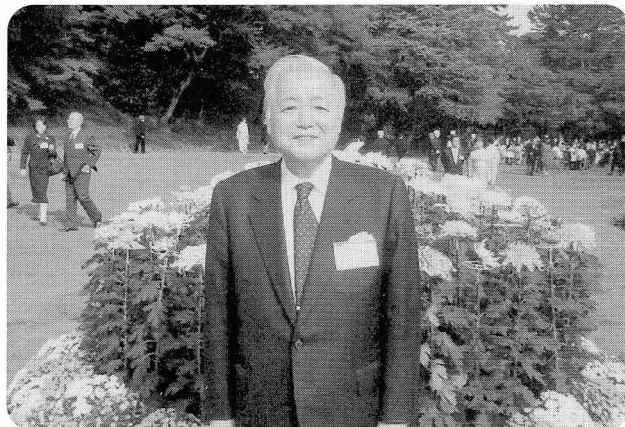
赤坂御苑の5つの池の周りに散歩道があり、10か所ほどのテントには茶菓、酒肴が豊富に用意されており、フロックコートの宮内庁職員が見事なマナーですすめてくれるのでした。また池の辺の芝生では雅楽の調べや楽隊の響きが楽しめるのでした。

午後2時、私たちはお道筋の一侧に並んで2時10分にお着きになった天皇皇后両陛下、皇族各殿下をお迎えすることになりました。

お道筋にお入りになって間もなく、天皇陛下から私にお言葉がありました。それは「大事なお仕事ですよ」という静かでお優しい響きのお言葉でした。「ありがとうございます」と申し上げると、そのまま私の顔をご覧になっているのです。「実は昭和38年に山口県にお出でになったとき、岩国の三井石油化学でお迎えしたことがございます」と申し上げてしまいました。「ああ、あれから随分時間が経ちましたね」と仰ってお笑いになりました。昭和34年にご結婚なさった皇太子・同妃殿下が4年後に行啓されたのでしたから、ご記憶にあったのでしょうか。皇后陛下もお声をかけてくださったのです。

天皇陛下からお言葉を頂くと、ご一行が立ち止まられるので、ご結婚前の紀宮さまには「おめでとうございます」と私から申し上げ、「ありがとうございます」というお言葉を頂戴しました。

園遊会では、立法・行政・司法の要人や産業・文化・芸術・社会事業などで著名な方々とお会いすることができました。



皇太子・同妃殿下が岩国へお出でになったとき、私は北海道の三井鉱山から三井石油化学へ転任して1年目でした。皇太子には侍医が同道しないから、必要な場合は頼むという電話が宮内庁からあったのです。会社は救急車を常備していましたが、必要な場合は救急車で一緒に国立病院へと決心して、お顔の見える位置にいたのです。もちろん、ご挨拶を申し上げるのは社長や工場長でしたから、私は秘かにお迎えしたに過ぎません。

お茶を差し上げる時間も決まっており、社長が玉露をと指示したのですが、私が宮内庁に電話したら、番茶をお出しするよというのです。三井クラブの管理人が「お茶の温度は」というので、私は「40度」と体温に近い温度を答えましたが、そのお茶を「お代わりなさいましたよ」と褒められたりしました。

そんな思い出が甦ってきた「園遊会」の感動をお伝えできれば幸いです。

私が園遊会にお招きいただいたのは、企業での産業医として、産業医科大学そして日本予防医学協会で、さまざまな仕事を続けてきたおかげであろうと思います。

研究紹介・学会報告

産業医科大学の国際研修事業について

高橋 謙

(産業医科大学 産業生態科学研究所 環境疫学)

産業医科大学では昭和60年以来、JICA（国際協力機構）の産業医学分野における国際集団研修コースを実施している。昨年までは「産業医学」コースとして、20年間で43カ国208名の研修員を輩出した。研修修了者の中にはその後本国で関連の重要な行政ポストに就いたり、国際的活躍をしたりするようになった人もいる。また、修了者が本学を含む大学院へ進学したり、国際共同研究を進めるようになった例もある。大学として世界に誇れる実績を挙げたという自負を抱えている関係者は少なくない。しかしながら、昨年20年の節目を迎えたことから一定の区切りをつけることになった。

幸いにも申請していたコースの新設計画が認められ、「産業医学」（旧）コース改め「持続可能な発展のための職業環境保健マネジメント」（新）コース（略称「発展と職業環境保健」）として引き継がれることになった。旧コースがどちらかと言えば職業病を中心とする狭義の産業医学の範疇で実施されていたとすれば、新コースは産業保健を広義に捉えようとしている。すなわち、新コースでは疾病や環境汚染に予防原則を適用することを基本理念として、労働者の健康増進や福祉の向上、さらに快適環境の創出（職業環境保健）を目標に含めている。このような目標を達成するためには学際的人材が役割分担（マネジメント）をする必要がある。対象者の範囲も広げ、職業環境保健の実務者や教育研究者の他、保健医療専門家、関連の行政官、労使団体やNGO関係者等を含めることにした。

その記念すべき第1回コースは10カ国11名の研修員を迎えて昨年8月から11月末まで行われた。期間中二度のリアルタイム国際遠隔講義を組み入れることができた。初回は、国立シンガポール大学と台湾国立成功大学と結び医療従事者の感染症対策について、二回目はフィリピン労働安全衛生センターと結び石綿対策について、それぞれ討議した。国際遠隔講義は平成14年度にマレーシアと結んだ遠隔講義（東敏昭産業生態科学研究所所長の指揮による）が先例となっており、正規カリキュラムに組み込んでいる。これまでテーマによってはテレビ・新聞の注目も集めており、報道は累計で8件を数える。

個人的には旧コースが開始した年に産業医科大学に来て本コースとの縁が深まっていった。三年前からコースリーダーを拝命している。長年コースリーダーを務めた吉村健清産業医大前教授（現福岡県環境研究所所長）や関係の深い厚労省・JICA・KITA（北九州国際技術協力会）とのパイプ役を務めた大久保利晃産業医大前学長（現放射線影響研究所理事長）ら、多くの方々のご尽力の上に現在のコースが成り立っていることを強く意識している。異なる文化や考え方を持つ人たちとの交流は常に新鮮であり、貴重な経験をさせていただいている。が、新陳代謝のためにいずれ適任者に交代したいと考えている。

平成17年度産業医科大学・カソリック大学 定期交流会

瀧上 知恵子、梶木 繁之、森本 泰夫
(産業医科大学)

産業医科大学産業生態科学研究所とカソリック大学公衆衛生大学院との定期交流会が、昨年11月17日から3日間にわたり行われましたので、報告します。本交流会は、卒業後修練コースの国際交流の第一歩として、産業医学を志し修練を行う同胞が、まずは親睦を深めること、及び産業医学に係わる新たな共同研究の礎になることを目的とした交流プログラムで、平成12年から開始され、今年で7年目となります。今回は本大学への訪問であったので、今年カソリック大学に来学しました。本学からは、伊規須教授を団長とし教員5名、産業保健研修コース、産業医修練コースIから16名の総勢21名が参加しました。3日間の主なプログラムは、セミナー、工場見学、懇親会、国立中央博物館です。



木材加工会社にて

セミナー

カソリック大学公衆衛生大学院長のPark教授より開会及び歓迎の挨拶、伊規須教授から御礼の挨拶がありました。その後、伊規須教授より当研究所紹介として、研究所の状況及びアクティビティが報告されました。今年の新たな試みとして、将来の共同研究を視野に入れて両国における研究内容を三題ずつ報告しました。日本側から作業病態学の吉積先生から産業保健におけるインターネットの有用性として、インターネット傷病休業データベースシステムを開発し、休業状況から健康管理の評価を報告しました。また、呼吸病態学の大神先生と筆者は、ナノ粒子やアスベスト代替品の生体影響評価として独自のハザードアセスメントシステムを報告しました。韓国でも日本と同様に石綿工場周辺住民を含めた悪性中皮腫が発症しており、活発な質疑が展開され、関心の高さが伺えました。韓国からは、Lee教

授、Kwon先生、社会人大学院生で産業看護職のChoi先生から、地下鉄労働者におけるメンタルヘルス、作業環境管理、禁煙指導に関する報告が行われました。地下鉄会社のトータル的な労働衛生管理を互いに協力し展開しており、到達レベルの高い報告でした。

工場見学

二日目は、朝から2つの工場へ見学に出かけました。最初に訪れたのは、SUN BOARDという、木材加工会社。はじめに会社の概要をビデオで説明いただきその後、実際の作業現場へと向かいました。この会社は、外国からも木材原料を輸入しており会議室には、韓国をはじめ、日本やニュージーランドなどの地図も表示されていました。主力製品は一般的な建築用の木材（柱）やベニヤ板だけでなく、数年前から製造が始まった、MDF（Medium Density Fiberboard）という、最先端の技術を使った、合板等がありました。（MDF：粉末状の木材片を粘着性のある物質と混合・圧縮・加熱し、様々な厚さに加工してできる合成板の総称）この技術により、以前は廃棄していたものが、今では全く捨てるどころがなくなった、という説明は、技術の進歩が環境へも影響していることを感じさせました。作業場は、機械化が進んではいるものの、随所で人による作業が今も存在し、場所によっては100dB（A）をゆうに超える騒音職場でしたが、皆さん耳栓の着用をしっかりとされていました。一般の作業の方と同じ職員食堂で昼食を済ませた後（昼食にはもちろん、キムチが出されました）、一行は、食堂横の医務室へ。こちらの会社では、フルタイムの看護師さんが中心となって活動されていました。医務室の一角には、風邪などの際に飲用できる、葉草を使った栄養ドリンクが準備されており、試しに飲んだ修練医は複雑な顔をしていました。（部屋の中に漢方薬のようなにおいが充満したことはありません）

1つ目の工場見学が終了した後、今度はDAEWOO（太宇）Electronicsの仁川工場を訪問しました。先の会社と同様に、簡単な説明を受けた後、工場を見学しましたが、この工場では主に冷蔵庫の生産ラインを見学しました。現在でも製造工程のかなりの部分に作業の方が関わっておられ、労働集約型産業であることを実感しました。ここでは、見学の途中で、韓国ならではの製品を発見しました。その名も「キムチ専用冷蔵庫」。工場の中でもひときわ大きく、容器の出し入れがしやすいように、他の冷蔵庫と少し形状が異なっていました。製造工程こそ違っても、ほとんど国内向けとして作られているキムチ用冷蔵庫の存在は、日本の工場ではおそらく目にするのでできない韓国ならではの貴重な経験であったと思います。帰りのバスの中で聞いたガイドさんの話では、最近どこの家庭でもキムチ専用の冷蔵庫を1つは持っているのが一般のこと。ちなみに、韓国では冷蔵庫は一家に2-3台が普通のだそうです。こちらの工場の医務室も見学させていただきましたが、個人毎にカルテを作成し、風邪や腹痛などの一般的な臨床対応がメインの活動ということでした。木材加工工場と冷蔵庫製造工場の双方で、韓国ならではの作業現場を見学することができた、工場見学でした。

懇親会とカラオケ

セミナー終了後、カソリック大学の講堂で懇親会が行われました。カソリック大学の教授、先生、大学院生の方などたくさんの方とお話しする機会をいただき、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。懇親会に続いて、二次会としてカラオケパーティーが行われました。懇親会とは違い、ざっくばらんな雰囲気日本で韓国産業保健のこと、それ以外にも文化のことなどを話し合い、お互い友好を深めることが出来ました。

国立中央博物館見学

10月末に開園した国立中央博物館を見学しました。世界でも指折りの規模を誇る博物館とあって、古代の展示品が中心で質・量とも豊富で、2時間の予定では、すべてを見

学することは、とうてい無理でした。しかし、韓国の歴史を身近に触れることができ、両国の歴史の歩みが互いに類することより、あらためてアジアの同胞であることを歴史・文化の面から実感できました。

最後に

次回は2007年初旬に、当大学への訪問となりますが、積極的かつ活発な交流であるばかりでなく楽しい企画となるように検討したいと考えます。ご興味のある方、是非、交流会に御参加お願いいたします。

「日本産業衛生学会 中小企業安全衛生研究会 第39回全国集会」開催報告

第39回全国集会事務局 日野 義之
（産業医科大学 産業医実務研修センター）

平成17年12月10日(土) 10-18時、福岡県医師会館を会場に、中小企業安全衛生研究会 第39回全国集会（担当世話人：森田哲也（福岡労働衛生研究所））が開催され、日本各地から233名の方々に参加いただきました。

従来から中小企業における産業保健の充実が、我が国の産業保健における大きな課題であります。昨今のアウトソーシングの流れは、中小企業に大企業との関連を少し違う形で意識させ、課題を少し変化させています。この変化は、大企業においても、関連中小企業との連携を視野にいれ活動することを求めており、相互の関係について再考すべき状況といえます。このような流れをうけ、シンポジウムでは、「大企業と関わりながら多様な就業形態をとる中小事業場の安全衛生」をテーマとし、大企業専属産業医（田中雅人先生：トヨタ自動車九州）、中小企業嘱託産業医（服部 泰先生：服部労働衛生コンサルタント事務所）、産業看護職（宮崎由美子保健師：北海道労働保健管理協会）に登壇頂き、様々な産業保健上の課題や問題点に関する発表ならびにフロアー参加者も含めた討議が行なわれました。基調講演では、「厚労科研・今後の産業保健のあり方に関する研究-成果をどう生かすか」を東 敏昭教授（産業医科大学 産業生態科学研究所）にご講演いただき、産業保健のこれまでと今後の課題を、中小企業を視点にすえて整理いただきました。特別講演は2題で、森 見爾教授（産業医科大学 産業医実務研修センター）には「最近の労働衛生の課題」を、広瀬俊雄先生（仙台錦町診療所・産業医学センター）には「実地医家による中小企業産業保健の推進」として臨床家による産業保健実践についてお教えいただきました。演題発表（口演発表6題）では、実務家・専門家による最新知識の交流と活発な意見交換が行われ充実した研究会となりました。中小企業安全衛生研究会全国集会是、日本各地で年1回開催されますが、久しぶりの九州での開催で、多数の方々にご参加いただき、多くのご支援・ご協力をいただき成功裡に終えることができました。



部 会 報 告

◇産業衛生技術部会◇

産業衛生技術部会の活動状況

産業衛生技術部会幹事 保 利 一
(産業医科大学 産業保健学部 第1環境管理学)

産業衛生技術部会は、産業衛生分野における諸技術、特に作業環境管理、作業管理を中心とした産業衛生技術の向上、発展をはかることにより、産業衛生学の進歩に資することを目的として平成13年4月に発足しました。大会は年2回、春の日本産業衛生学会総会と秋の全国労働安全衛生大会のときに開催しており、これまでに準備会を含め、計12回開催されています。

大会のシンポジウムでは、インダストリアルハイジニスト、衛生管理者の役割、労働安全衛生マネジメントシステム、許容濃度の作業現場への活用法、職場改善へのサポート、世界調和システム（GHS）の紹介など、産業衛生技術に関連するさまざまなテーマを扱ってきました。今回は平成18年5月に仙台で開催される第78回日本産業衛生学会のフォーラムとして、現在話題となっている石綿の問題を取り上げる予定です。学会開催期間中でもあり、技術部会以外の学会員にも関心が高い問題だと思しますので、技術部会員以外の方でもお気軽にご参加ください。

技術部会には各種の委員会が設置されており、それぞれ活動を行っています。編集委員会では、平成14年5月から約2年にわたって「産業衛生学雑誌」誌上に連載してきた「産業衛生技術」講座の内容をまとめ、平成17年3月に「産業衛生技術入門」として中央労働災害防止協会から出版しました。この「産業衛生技術」をテキストとして、企画委員会、教育研修委員会が中心となり、専門産業衛生技術研修会を企画し、開催しております。また、表彰委員会では日本産業衛生学会産業衛生技術部会奨励賞（通称：中明賞）を設け、産業衛生技術の分野における研究または実践活動において、著しい業績を挙げた産業衛生技術部会員を表彰する制度も設けております。

九州地方会は、産衛地方会の自由集会のなかで、喫煙対策ガイドラインの改正、管理濃度改正、石綿障害予防規則の制定など、そのときのホットな話題を提供し、議論してまいりましたが、これまでの活動は必ずしも活発とはいえませんでした。最近、JFEスチールから近藤充輔先生、労研から伊藤昭好先生が相次いで産業医大に赴任され、地方会のスタッフも充実してきましたので、より充実した活動が展開できることが期待されます。

産業衛生技術は、現場に役立つ技術であることが重要ですので、本部会には研究者だけではなく、実務者、すなわち、衛生管理者、衛生工学衛生管理者、作業環境測定士等として活躍している人たちの多くの参加が望まれます。しかし、現在のところ、事業場でこれらの職務についている人々の多くは学会員でないため、技術部会の会員となることはできません。これらの現場の技術者どどのようにコミュニケーションをとっていくかが今後の重要な課題であると考えています。

◇産業医部会◇

九州地方会産業医部会の活動

産業医部会幹事 藤 代 一 也
(九州電力株式会社)

平成15年より九州地方会産業医部会が正式に発足し、健康管理研究会を引き継ぐ形で活動を始めています。現在会長は九州電力の藤代が、事務局担当幹事は同じ九州電力の吉川が担当していますが、事務局は産業医科大学・産業医実務研修センター内（全国の事務局と共通）に置かれています。幹事は、九州地方会の担当理事の先生方や九州地方会からの日本産業衛生学会・産業医部会・幹事の先生方及び数名の先生方で構成されています。

今年度は平成17年11月19日(土)に、昨今話題になっているリスクマネジメントからみた産業保健分野での疾病管理のあり方を検討するにあたり、糖尿病を主とする生活習慣病の新たなコントロール方法について、現在九州大学等で取り組まれています疾病管理事業（カルナ事業）の紹介を中心に九州大学の中島直樹先生よりご講演いただきました。同日には総会も開催されました。

さらに、九州地方会産業医部会連絡会が九州地方会開催に併せて開かれましたが、日本産業衛生学会産業医部会総会は春の学会総会時に開催されるようになったことをうけ、本会も地方会時に総会を、冬の研究会時に連絡会を開催する（すなわちこれまでと入れ替える）こととなりました。研究会・連絡会はより会員の情報交換を趣旨としたフランクな会にできたらと考えていますので、九州で活動されている産業医部会会員の先生方の積極的な参加をお待ちしています。

なお、九州の先生方におかれては日本産業衛生学会産業医部会への入会手続きをもって九州地方会産業医部会への参加意思とさせていただきます（学会入会とともに自動的に九州地方会に分類されるように）ので、よろしく願います。日本産業衛生学会産業医部会では、入会手続きを行っていますので、先生方の手続きをお待ちしています。

◇産業看護部会◇

産業看護部会活動報告

産業看護部会副部会長 日 笠 理 恵
(福岡県市町村職員共済組合)

去る11月19日(土)の午後に東京第一ホテル福岡（福岡市博多区）において、平成17年度総会ならびに産業看護研究会が開催されました。

総会は、28名の部会員の出席のもとすべての議事が滞りなく承認され、平成18年度からは総会が九州地方会学会（本年は6月30日、7月1日）において開催されることが報告されました。

産業看護研究会は、九州ブロック産業保健推進センターとの共催で、「健康日本21の未来に産業保健サービスが果たす役割～地域の現状・行政の動きから～」をテーマとした鼎談を行い、九州各県から35名の参加者がありました。

まず、進行役の榎アサヒビール博多工場の住徳松子先生より、産業看護職は地域保健の一端を担っているにもかかわらず、国の政策等に疎いという反省に立ち、現状と今後の方向性や産業看護職の役割を確認するという、今回の鼎談の目的が示され、聞き手である榎日立金属若松の上原直美先生より、最近の教育課程において、「健康日本21」がどのように取り上げられているかが紹介され、話し手の先

生方に向けて産業、地域それぞれの分野でどのように位置づけられているのかという質問が出されました。

それを受けて、産業看護の立場から(財)九州産業衛生協会の柴戸美奈先生より、そもそも「健康日本21」とは何かについて、またその基本的な考え方の背景として、政府の骨太方針を基盤とした厚生労働省の政策であることが話され、9月の厚生科学審議会の部会において行われた「中間とりまとめ」の概要が報告されました。

また、地域看護の立場から福岡県宇美町役場の飯西美咲先生より、地域の活動事例として「個別健康教育」を重視した宇美町の「国保ヘルスアップモデル事業 (UMIモデル)」が紹介されました。

その後の先生方の熱の入ったディスカッションや聴衆との質疑応答を通じて、これからの産業看護職には医療制度改革や介護保険の改正をにらんだ地域との連携により求められること、国の政策を視野に入れた活動が求められること、またそれと同時に保健指導に求められる質やその維持向上をより意識する必要があることが示され、大きな課題を改めて確認することができました。

最後に、今後の活動ですが、3月11日(土)に「運動」をテーマにし「労働者の生涯健康の支援を考える会」を予定しております。詳細が決まり次第産業看護部会員の皆様にはご連絡いたしますので、ご参加をお待ちしております。



え切れず、臨床から離れ、平成6年に大学院へと進みました。

大学院での研究テーマは、人工関節が緩むメカニズムについてでした。労働衛生の分野では、シリカやアスベストの微粒子や微細繊維が肺炎を起こすことが知られていますが、人工関節から発生するポリエチレンや金属の微粒子も炎症を起こし、炎症性のサイトカインが骨を溶かします。

この研究のデザインを考えていたときに、たまたま産業医科大学産業医実務研修センターでの短期研修カリキュラムで、人工鉱物繊維の細胞へのばく露実験を履修しました。自分の考えていた研究デザインとこの実験の内容がよく似ていたため、実験を担当されていた産業生態科学研究所の産業保健管理学教室の藤野昭宏先生と加地 浩先生をお願いして、研究のご指導と研究場所のご提供を受けました。

産業生態科学研究所では、研究の傍ら、初めて嘱託産業医活動も経験させていただきました。当初は、どのように産業医業務を行えばよいかかわからず、戸惑うことも多かったのですが、次第に産業保健の面白さに目覚めてきたように思います。

本格的に、産業医学の道を進み始めたのは、平成10年に産業保健管理学教室の教員にさせていただいてからです。さらに、平成12年より堀江正知先生が着任され、ご指導いただくようになってからは、産業医学に対する見識が一段と深まったように思います。

今回、専門医の試験を受けるために勉強したことは、これまでの産業医学に関する知識を整理し、足りない部分を補強する上で、大いに役立ったと思います。しかし、産業保健の分野の奥深さも知ったように思います。

専門医に認定していただいたとはいえ、まだ、産業医の経験も浅く、産業保健活動を行う上での知識や技術は十分ではないことも自覚しています。これからも、産業医学に関する知識や技術を積み上げて、社員や事業主に信頼されるプロフェッショナルの産業医を目指していきたいと思えます。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、宜しく申し上げます。

日本産業衛生学会専門医紹介

昨年、専門医を取得された九州地方会員1名をご紹介します。

専門医までの道

筒井隆夫 (専門医登録番号203)

(産業医科大学 産業生態科学研究所 産業保健管理学)



この度、日本産業衛生学会が認定する専門医に合格することができました。指導医をお引き受け下さった堀江正知先生を始め、多くのご指導をいただいた先生方に感謝申し上げます。

私は、平成2年に産業医科大学を卒業後、整形外科の臨床医を目指して研修していました。しかし、研修2年目に、手術件数の多い病院で、度重なる手洗いと長時間に渡るラテックス手袋のばく露により、職業性の接触性皮膚炎(ラテックスアレルギー)を発症しました。その後2年間は、さまざまな工夫をして何とか臨床をこなしていましたが、やはり手指の痒みに耐

え切れず、臨床から離れ、平成6年に大学院へと進みました。

編集委員報告

職場のメンタルヘルス対策のコツについて

永田耕司

(活水女子大学)

現在、教鞭の傍ら、学校(学校医、スクールカウンセラー)・児童相談所・外来診療などに加えて、非常勤産業医として長崎県庁、九電工、長崎新聞社の事業所に関わっています。(来年度からは長崎市も入る予定ですが……) 来談者も多く、例えば昨年度は、長崎県庁では月2回午後からの面談で延べ300名近くの職員や家族の相談・診療を行いました。催事案内の紹介がないので、産業医としてメンタルヘルス相談や健康増進を実施するにあたって以下の9点が大切であると感じています。

- 1) 気軽に相談できるよう相談室づくりと職員への啓蒙など。
- 2) 産業医としてカウンセリング・マインドで相談者と接すること。
- 3) 「傾聴演習(リスナー研修)」を取り入れた健康教育
- 4) 保健師などのスタッフとの連携、専門スタッフがない場合はサポーター制度の導入

- 5) 職場復帰の際のルールづくりと試し出勤の導入
 - 6) 健康管理委員会や安全衛生委員会への参加
 - 7) 外部医療機関、担当上司との連携
 - 8) 時間外や家族、上司、同僚などからの相談など多様な相談にも対応していくこと
 - 9) 自殺などが出たときの職場への緊急介入
- 今回は、3) 4) 5) 6) 9) について説明します。

3) 「健康教育の工夫」、は、(1)うつ病やうつ状態は10人に1人はかかり、「心の風邪」などというように「誰もがなりうる」という説明が大切です。(2)精神系への薬への内服は「クセになる」「副作用がある」など、不安が強い人が多いので、依存性や耐性などの薬の副作用はほとんどない等の説明が大切です。

またこれまで、自殺や過労死の意見書を書いてきましたが、そのような事例のほとんどが職場の業務の量や質のストレスだけでなく、職場内でのコミュニケーション不足が要因の一つとして考えられました。このようにメンタルヘルスの予防には職場内でのコミュニケーション(カウンセリング・マインド)が大切であることを説明し、実際のやりとりを提示しながら、三人組になっておこなうロールプレイ演習(傾聴演習)を健康教育の中で取り入れることが有効であると思います。その中で「カウンセリングという難しいイメージですが、9割は態度で、一つコツ(白い球を投げ返すこと)だけを学べば誰でもできるものなのです」という理解を深めていきます。

4) 保健師などのスタッフがいないような職場では、面談希望やストレス調査を実施して、電話連絡して面談したり、健診結果の要精検者対象の職員などに連絡して相談をしています。また他薦していただいて、総務や組合とは別のサポーター制度を創設し、気軽に身近に相談できる体制づくりを行います。

5) 長期休職していたり、休職を繰り返す職員がおられます。復職が近くなると、職場の敷居を高く感じはじめ、プレッシャーから再度体調を崩したり、再度休職されたりすることがあります。長期休職していると、復職してすぐフルタイムで働くというのは負担がかかります。よって、休職の期間内に「試し勤務」を内規規定で定めて、正式復帰前に1ヶ月-2ヶ月の試し出勤を行ないます。その際は休職中であるので、通勤中の事故などは公務災害として適応されないことを了承していただきます。

6) 9) 復帰後の当分の間、残業制限や出張禁止などを健康管理委員会です人事担当、職員厚生課、産業医、保健師を交えて決めていきます。また、安全衛生委員会も定期開催し、職員の健康増進のための話合いをもっていきます。ある職場で自殺職員が出た場合に早急な対応として、日曜日に担当職場の職員への全員面談、及び家族への慰問を行ないました。また、誕生月や干支ごとでグループ分けして、「職員が健康で生活や仕事をしていくためには？」でいろんな意見を出して、職員間のコミュニケーションをはかるための様々な取り組みを行なうと、職員全体で考えるきっかけづくりになるようです。

以上、これまでのメンタルヘルス対策の取り組みについて説明してきました。それぞれの職場規模やマンパワーにあった取り組みをしていくことが大切です。また、職場でのメンタルケアをやっていくには、普段からのコミュニケーション、及び職員間の信頼関係が不可欠なようです。

最後に、ここ数年は多忙で、学会も全く参加できない状況が続いています。また、評議員としてのお手伝いなどできないまま、誠に申し訳なく思っております。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

研究会・研修会その他案内

日本産業衛生学会 九州地方会(久留米)開催のご案内

会 期：平成18年6月30日(金)～7月1日(土)
会 場：久留米大学医学部 筑水会館
〒830-0011 久留米市旭町67 久留米大学医学部構内
学会長：石竹 達也(久留米大学医学部環境医学講座教授)

日 程：

◆1日目：6月30日(金)

理 事 会：12:30～13:30 (1階小会議室)
一 般 受 付：13:00～ (1階ホール)
一 般 口 演：14:00～16:00 (2階イベントホール)
教育講演(I)：16:00～17:00 (")
「どんなストレスが悪いか-その機序と仕事との関係-」
演 者：田中 正敏(久留米大学教授)
懇 親 会：17:10～19:00 (1階中会議室)
自 由 集 会：19:00～20:00

◆2日目：7月1日(土)

一 般 受 付：8:45～ (1階ホール)
一 般 口 演：9:00～12:00 (2階イベントホール)
代議員懇談会：12:10～12:50 (")
総 会：13:00～13:45 (")
教育講演(II)：14:00～17:00 (")
テーマ：小規模事業場の産業保健

1) 「職場で実現可能なメンタルヘルス対策」

演 者：堤 明純(岡山大学大学院助教授)

2) 「嘱託産業医による産業医活動の実際」

演 者：江 寄 高史(えざきOHコンサルティング代表)

会 費：参加費 3,000円(会員・非会員とも)
懇親会費 5,000円

平成18年度日本産業衛生学会・九州地方会学会事務局

〒830-0011 久留米市旭町67番地
久留米大学医学部環境医学講座内
学会長 石竹 達也 事務局長 原 邦夫
TEL(0942)31-7552 FAX(0942)31-4370
E-mail: kankyo@med.kurume-u.ac.jp

第17回韓日中産業保健学術集談会のご案内

会 期：2006年5月25日(木)～27日(土)
会 場：Jeju Oriental Hotel (ジェジュオリエンタルホテル)
1197 Samdo 2-dong, Jeju City,
Jejudo, KOREA 690-808 (韓国済州島)
TEL: +82-64-752-8222/ FAX: +82-64-752-9777
E-mail: oriental@cheju.oriental.co.kr HP: http://www.oriental.co.kr/

テーマ：シンポジウム：健康増進活動 Health Promotion
ワークショップ：筋骨格系障害 Musculoskeletal Disorders

抄録締切日：2006年3月末日

*添付ファイル(もしくはFD,CDR等)を日本事務局へお送り下さい

参加登録費：US\$150.00 同伴者：US\$100.00

主催(代表)：大韓産業保健協会 Korea Industrial Health Association

TEL: +82-2-586-2412/ FAX: +82-2-585-1584

E-mail: pr@kiha21.or.kr HP: http://www.kiha.or.kr

日本側代表：大久保利晃(助放射線影響研究所 理事長)

(前・産業医科大学学長)

事務局長：東 敏昭 産業医科大学 産業生態科学研究所 所長

* 日本事務局：〒807-8555北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 TEL:093-691-7470/ FAX:093-601-2667
 E-mail: kjcjc@mbox.med.uoeh-u.ac.jp
 HP: http://wshiivx.med.uoeh-u.ac.jp/kjc/

**第26回産業医科大学・第7回産業生態科学研究所・
 産業生態科学研究所20周年記念国際シンポジウム**

開催場所：産業医科大学ラマツィーニホール
 (北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1)

開催日：2006年10月5日(木)~10月7日(土)

テーマ：“Active Transference of the Knowledge and Skills of Occupational Health and Medicine”

事務局：産業医科大学産業生態科学研究所作業病態学研究室
 担当 有松 〒807-8555北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 TEL: 093-691-7471 FAX: 093-601-2667
 E-mail: 26uoehis@mbox.med.uoeh-u.ac.jp

日本産業衛生学会代議員候補者推薦のお願い

日本産業衛生学会九州地方会では、標記について、以下の要領で推薦を受け付けます。ぜひご推薦いただけますようお願いいたします。

九州地方会会員の中から代議員候補者を10名以内の範囲で推薦できます。記載例を参考に、10名以内の被推薦者氏名を記載した用紙を各自で作成の上、下記の選挙管理事務局宛て推薦してください。1) 郵送、2) FAX、3) 直接持参のいずれかの方法が可能です。電子メールは不可です。8月31日(木)必着です。自薦も可能です。なお、地方会長や地方会役員の推薦を行うものではありません。

《記載例》

代議員候補者		} 氏名 (10名以内) を書く
産衛 太郎		
九州 次郎		
...		
...		
産衛 十郎		

上記の方々を推薦します。

推薦者氏名 _____
 日 付 平成18年 月 日

《提出先》

〒807-8555北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 産業医科大学 産業保健管理学教室内
 日本産業衛生学会九州地方会 選挙管理事務局
 FAX:(093) 601-6392 TEL:(093) 691-7407

九州地方会理事会報告

平成17年度 第2回九州地方会理事会が、平成17年12月24日(土)福岡産業保健推進センターにて開催された。

主な議題

1. 平成17年度第1回理事会議事録要旨(案)
2. 平成17年度事業報告及び決算中間報告
3. 平成18年度事業計画及び予算(案)
4. 平成18年度地方会学会の開催
5. 地方会各理事分掌事項
6. 日本産業衛生学会名誉会員・功労賞候補者の推薦
7. 九州地方会選挙管理委員会の設置

平成18年度の主な事業計画(案)

1. 地方会学会の開催(久留米市、6月30日~7月1日)
2. 研究会等の開催
 - 1) 労働者の生涯健康の支援を考える会
 - 2) 「失業と健康」研究会
 - 3) 第21回健康管理研究会
 - 4) 産業看護研究会
 - 5) 第106回九州医師会医学会第8分科会・産業医学会(大分)
3. 産衛九州地方会産業看護講座
4. 地方会ニュース「産衛九州」第20・21号の発行

編 集 後 記

2005年9月6日に宮崎県を直撃した台風14号は、長時間にわたる記録的な暴風雨により県内各地で死者13名、被害総額1,300億円を超える甚大な被害をもたらしました。特に宮崎市内約40%を供給する浄水場が水没し、私も3週間にわたって断水状態を経験しました。2週間目からは48時間に1時間の水道水が供給されましたが、まだまだ暑い時期でもありお風呂の制限は深刻でした。水の大切さを痛感した次第です。一方、災害復旧活動では、県外から経験を積んだ多数のボランティアが支援に入り、自治体と連携をしながらの救援活動は、今後の危機管理体制の構築にはよい教訓となったようです。

産衛九州では、会員の皆様からの社会医学に関係する生の体験情報、様々なご意見、ご感想をお待ちしています。
 (たか)

九州地方会ニュース「産衛九州」

発行 平成18年 2月 1日

編集正責任者：東 敏昭 (産業医科大学)
 編集副責任者：加藤 貴彦 (宮崎大学)
 編集委員：青木 一雄 (大分大学)
 青山 公治 (鹿児島大学)
 石竹 達也 (久留米大学)
 市場 正良 (佐賀大学)
 永田 耕司 (活水女子大学)
 永野 恵 (熊本大学)
 日笠 理恵 (福岡県市町村職員共済組合)
 山城 愛子 (沖縄県産業看護研究会)
 吉積 宏治 (産業医科大学)

(五十音順)

《編集事務局連絡先》
 〒807-8555 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 産業医科大学 産業生態科学研究所
 作業病態学研究室(担当:砂脇、吉積)
 TEL (093) 691-7471 FAX (093) 601-2667
 E-mail:saneikyushu@pumpkin.med.uoeh-u.ac.jp